

劉蘇里氏報告へのコメント

岩崎 稔

岩崎です。今日はそれぞれのコメンテーターの方たちがそれぞれの報告の意味を見事に拓いてくださっていましたが、それと同じようなことをやろうとしても、劉さんのご報告に対してはなかなか難しいです。とくに最後には「天から色んなものが降ってくるぞ！」とかいう恐ろしい予言があったものですから（笑）、ちょっと私も心して話さなければいけません。

全体で三つのことを申しあげて、私のコメントに代えたいと思います。一つ目は、「大国“新人”」という言葉であります。日本語の翻訳のほうでは、「大国の若者たちはどこへ向かうか」というふうに意識されておりますが、通訳の方の説明を聞きながら原文のほうを見ると、「大国“新人”」という述語になっておりました。二つ目は、「歴史の危機」という問題について、私なりの考えを述べたいと思います。そして三つ目は、言葉の意味はまたのちほど説明するつもりでおりますけれども、「ポスト・ユートピアの感覚」ということについて申し上げたいと思います。

まず「大国“新人”」のことについてですが、「大国」という言葉をたいへん苦労しながらお使いになっていらっしゃるという感じがしました。当然でありまして、中国という国が紛れもなく、しかも途方もない大国の歴史と、そして現在のパワーを持っている、ということは私たちがいよいよ痛感しているから、であります。そしてその「大国」の若者を「大国“新人”」として劉さんは問題を立てられましたが、ただ、劉さんのお話のなかに出てくる「ダメな若者たち」——酔っぱらって車運転して人を轢いちゃった、とかですね、「俺の親父は誰々だぞ」というふうに名乗っているとかですね、テーブルの脚を拭いたうゑにテーブルの上を拭いちゃう人とかですね、いろんな、最低限の生活規範がなくなっているような若者たちの例がいっ

ぱい出てまいります、「ダメな若者」比べをしたら、日本にもいろいろな例が出てくるかもしれません。ただ、「ダメな若者」比べをしても仕方ありませんし、それに「ダメな若者」比べというのは、「ダメな大人」比べでもあるということでしたから、われわれ大人がいかにダメなのかという話にもなってしまいます。

ただ劉さんがおっしゃった若者の現在の諸現象ということだけからですと、問題が非常に具体的には実感できるにしてもですね、そこからどんな問題が展開できるのか、考えることができるのかということについては、私自身は少々懐疑的でもあります。実は私の息子ももう二十歳でありまして、私の息子は幸いここまではダメな若者ではありませんが（笑）、どうしても「若者とは～」という議論をついついてしまう年齢になっています。ですから、若者比べの議論にはあまりコミットしたくないという気持ちがひとつあります。それに劉さんのご報告は、非常に切実な、現在の劉さんご自身が生きている現場の問題ですから、違う文脈の問題と混同してしまうのは、あまり適切でないかもしれません。

ただ日本における青年たちも、そして青年だけでなく大人もですが、別の形で非常に多くの困難に突き当たっているということだけは言わざるをえません。若者に限って言っても、貧困の問題、非正規雇用でしか自分の仕事を見つけることのできない問題はシリアスです。「プレカリアート」という新しい言葉が日本の若者たちの中に定着してしまっていること、これなども、そういう問題の一端だと思います。

ですから、どうしたら、劉さんがおっしゃった「大国の若者たちはどこへ向かうのか」という問題を、「東アジアの若者たちはどこへ向かうのか」という問題として拮据していくことができるのかと

いうことが、おそらく私たちが求められている問題の受け止め方なのだろうと思います。

二つ目に、劉さんは、この若者たちがまったく歴史を知らないだけではなくて、嘘八百の歴史を信じ込んでしまっているというふうにおっしゃいました。歴史を知らない若者というのは、残念ながら日本の現実、日本の文脈の中でも痛感せざるをえません。おそらくちょっと文脈は違うにしても、日本の社会をいろいろなところで支配してきている新自由主義的な考え方は、「歴史は必要でない」という発想に立脚していますし、あるいはせいぜい新自由主義がよしとする歴史というのは、所詮世界というのは弱肉強食で、強い者が勝つのだよ、ということではありません。それに、若者たちにクイズをして、アジア太平洋戦争でどこどこが戦ったのかということ聞いたときに、やはり私たちとしては耳を疑うような答えが出てくるわけです。劉さんとは違う文脈ではありますが、歴史というのが足もとを脅かされている、というのは同じだろうと思います。

私は最近痛感しているのですが、ある歴史的な知識が欠落しているとか、ある特定の立場の歴史で彩られているというだけではなくて、そもそももっと根幹のところで、「歴史性」というものについての構造といいますか、感受性が壊れはじめているのではないかと思います。その意味で、歴史の危機という問題は、日本の文脈であれば日本の文脈で、韓国であれば韓国の、台湾の、香港の、それぞれの地域において、「東アジアの歴史の危機」という問題として考えなおすことができるだろうと思います。

三つ目に、劉さんがおっしゃったことのなかでとりわけ気合いを込めたといいますか、低音をきかせて(笑) 迫力をもって語られた、文革の問題、あるいは革命の問題や革命世代以来の問題についてです。最初に「ポスト・ユートピア」の感覚と申しあげました。実は劉さんとは、一昨日、会食の席でたまたま前に座って、この文革のこと、革

命期のことをどう考えるのかとか、あるいは東アジアの戦後、日本の戦後をどのように考えるかということについて少し意見を交換いたしまして、劉さんの判断について非常に納得した部分と違いを確認して終わった部分がありました。

「ポスト・ユートピア」の感覚という概念で私がことさら言いたいのは、この49年の中国での大きな革命や、それから日本でも、世界全体を根本からひっくり返すようなものではないにしても、50年代、それから60年代から70年代の前半くらいまでに、学生たちや労働者たちのなかに、ユートピア的な志向、ユートピア的な議論が存在しました。そして残念なことに、この文革よりもはるかに規模は小さいにしても、そのグロテスクさと誤りの質においては非常によく似た政治的な失敗の経験をやはりしています。ですから、70年代のある時代以後は、その深刻な政治的な失敗を抜きにしては、どんな政治的な問題も、あるいは「よき社会」という議論もできないような時代になってきていると思います。反スターリン主義とは、ほんとはそういうことであるべきです。

ユートピアに対する幻滅があるからこそ、たとえば新自由主義が出てきたときに、世界の中ではとにかく資本が、より効率的にお金を儲ける以外にはルールはないと言われたときに、かつて学生運動をやった人たちなんかは下を向くしかないことになっていくわけです。つまり、今ある現実とは違う何かというものをユートピアの内実だととりあえず考えるとすると、ユートピアへの幻滅ということは日本の社会においても、小さいとはいえ、やはり深刻な問題でありました。

「ポスト・ユートピアの感覚」とは、そうしたユートピアへの幻滅を経て、私たちが現実に対してどういう態度をとるのかという問題でもあります。これはたんなる決断のような言い方ですからあまり説得力はないかもしれませんが、私はユートピアへの幻滅という問題をごまかすべきではないと思いますが、同時に、だからあとは資本しか

ないというふうには思っておりません。つまり、ユートピアを語りながらひどい破壊をつくり出してしまった、そういう論理とか、運動とか、経験の問題をひとつとしてごまかしをしないで、しかしなおかつそれでも向かっていくというような姿勢を、私はさしあたって「ポスト・ユートピアの感覚」と名づけようと思います。もっと甘ったるい言い回しになるかもしれませんが、別の言い方をすれば、「希望」ということでもあるのかもしれません。

そう考えますと、劉さんが最後におっしゃった恐ろしい予言が現実にならないという希望を持ちながら、ユートピアへの幻滅を利用して行われる現状の支配関係もまた、やはり若者を退廃させているのであって、「ポスト・ユートピアの感覚」を保持しながら、そこに暴力ではなしにもっと違う本来の正義の実質というのをどうやって与えていくことができるのかということを考えるべきだと思います。暴力でないもの、は言論であります。愚直に言論でやっていくしかないし、言葉の表現でやっていくしかない。新自由主義と闘うためにも、それからその新自由主義がつけこんでいるさまざまな実体的な暴力と闘うためにも、最後のところは言論や言葉や書物しかない、そういう気持ちもありまして、この東アジア出版人会議のアジアに対する相互理解のための議論をつくろうという志に賛同しております。

(いわさき　みのる・東京外国語大学大学院総合国際学研究院)